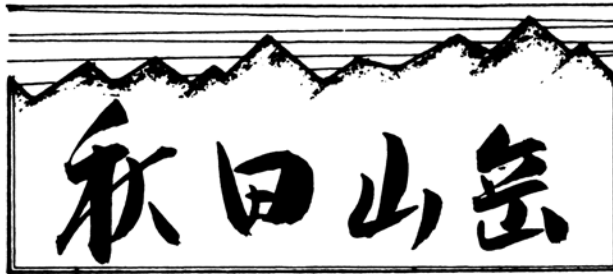


2019



令和元年 7月 発行

No. 112

社団法人 日本山岳会秋田支部

秋田市泉菅野
1-2-14 鈴木方

TEL・FAX 018 (823) 2708

発行 秋田支部
編集 鈴木裕子

●●●●● 北林嘉鶴子氏追悼 ●●●●●

北林嘉鶴子氏追悼

福田光子

北林さんは、所属していた写真山会(山岳写真家川口邦夫氏主宰)の撮影山行で北アルプスでの活動が先行し、中央部の知人から元秋田支部長の佐々木民秀氏を紹介されて、アキタ・アルパイン・クラブ(通称A.A.C.以下A.A.Cで記す)に入会し県内の山に登るようになる。間もなく昭和四十八年に日本山岳会に入会しました。

秋田支部の山行もA.A.C.の山行にも熱心に参加していましたが、何といても海外への山旅が多かった。まだあまり海外旅行をする人も少なく、海外トレッキングが始まったばかりの昭和四十年代でしたのでA.A.C.の中では結構羨望の的で、新聞紙上でも話題になりましたが、本人は不本意のようであり多くを語りませんでした。

たくさん海外の旅で、お土産話もたくさん伺いましたが、秋田支部にもA.A.C.にもその記録は、残念ながら殆ど残っていません。同じ時期に日本山岳会に入会した私



は、半世紀に近い日々をお付き合いしてきました。日本山岳会の行事にもお互いに誘い合って参加した。日本山岳会恒例の年次晩餐会への出席も常連で結構名物人でした。濃厚で時々飛ばす冗句で場を盛り上げるなど、天塩会(日本山岳会第一回ヒマラヤトレッキング研修会)

参加メンバーの同好念のメンバーからは「秋田の姐御」と、慕われておりました。

昭和四十年代はマイカーが普及し始めたと言っても女性のドライバーはまだまだ少なく、県外の山に出かけるのも公共交通機関を利用するという時代でした。二人で遠出もしておりました。晩秋の唐松岳

では、山頂はすでに氷が付いていた。文化の日に出かけた八ヶ岳では、急な降雪で行者小屋がその日に閉鎖されて仕方なく赤岳鉱泉まで戻って宿泊、翌日快晴になったので北八ヶ岳を堪能した。吾妻連峰の縦走や南蔵王などにも夜行列車を使って出かけました。あの頃、A.A.C.はゴールデンウィークの鳥海山中島台での合宿、夏山山行、

十一月後半の碓氷からの七高山と、鳥海山へ年数回の山行を行っていた。当時は十一月になると鳥海山麓はすでに積雪があった。ある年の十一月後半に連休では、矢島町熊の子沢集落から歩き碓氷川ヒュッテ泊、翌日はブルーアイズで、アイゼン歩行も厳しく更に強風と天候が悪化し舍利坂で下山した。山行では故加賀谷功氏とともに最高齢参加者だった。

後年、戸来岳への秋田支部の山行、高齢の北林さんには少しハードルが高かったようで、途中「もういいから先に行つて!」と何回も言っていたが、先行メンバーが下山の準備を始めた頃山頂到着、みんなの大歓迎を受けた。九十歳でも山への誘いを断ることはなく、いつも山行のメンバーで、山を、自然を愛しんでいた。

北林さんは九州福岡で出生、長崎育ち、山登りは子供時代に父親の狩猟について歩き覚えたと言いました。女学校を終えると中国に渡り、戦中戦後を中国東北部で過ごす。中国の勤務先医療関係の職場で秋田県出身のご主人と知り合い結婚、二児を授かる。戦後の中国内戦時は中国人と生活を共にしたということ。中国語で喧嘩ができる」というほど中国語は堪能でした。

引き揚げの頃はハルビンでの生活、日本への帰国は、昭和二八年最後の引き揚げ船で乳児を抱えての旅だった。九州のご実家でしばらく過ごし、秋田での生活はその後のこと。当時、川尻にあった引き揚げ住宅から泉地区に転居したのは昭和四〇年代に入ってからでした。九州や大陸とは文化の違う秋田での生活は厳しいものがあつた



ゴーキョピーク登頂
秋田さきがけ紙掲載

ようですが、そういうことは持ち前の芯の強さで乗り越えたようで、私が知った頃はすっかり秋田人でした。それはまた後年まだ若い長男の敏行氏が不慮の事故で先立たれた時も同様で、ご自分の苦悩や悲哀は全く見せず、残された幼い三人のお孫さん達のためにと奮闘する良きおばあさんでした。

植物にも造詣が深く北国では温度管理が大変なカトレアやシンビジウムも見事に咲かせる。又、高山植物についても詳しく、コマクサやチングルマなど、難しい高山植物でも実生から難なく育て増やして、花を咲かせ季節を楽しんでいた。

天塩会は後年も数年ごとにハイキングや集まりを行っており、北林さんはいつも参加しておりました。二〇一六年五月、そのメンバーの中島ドクターと三渡さん安藤さんの三人が来秋、ランチタイムで昔話のひと時を過ごした。久しぶりの再会に北林さんは穏やかな笑顔を見せていた。

高齢でも一人暮らしで頑張っていた北林さん、百歳まで頑張って永年会員になりましたよという願いはかないませんでした。たくさんのお教示をありがとうございました。共に歩いたあの日のこと忘れません。(合掌)

主な山行歴 (その他多くの国内の山々及び海外トレッキング)

- 昭和 46~7 年・台湾玉山
- 昭和 47 年 ・ヨーロッパアルプス撮影トレッキング
- 昭和 48 年 ・ネパールエベレスト街道トレッキング
- 昭和 53 年 ・ネパール ムクチナートトレッキング
- 不詳 ・ネパール ・カラバタール登頂
- 昭和 57 年 ・ネパールランタン谷トレッキング
- 不詳 ・台湾雪山登頂(70 歳)
- 不詳 ・スイストレッキング
- 不詳 ・バルトロ氷河トレッキング
- 不詳 ・カナダ パンプ国立公園の旅
- 平成元年 ・中国祁連山隊参加
- 不詳 ・チベット鉄道の旅(チョモランマベースキャンプを訪ねて)
- 平成 13 年 ・ネパールゴーキョピーク登頂 (八十歳・当時の最高齢者記録)



北林 嘉鶴子 氏

大正十一年四月二十九日生
昭和四十八年三月日本山岳会入会
会員 No. 七五八四
紹介者 柴田均二氏 高田俊雄氏
平成七 年四月 終身会員
平成十一年四月 秋田支部副支部長
平成十七年四月 秋田支部顧問
平成二十九年七月十七日逝去
享年九十六歳

北林さんへの想い出

佐々木 民秀

昭和四十六年のある日、中年の女性が職場にいた私を訪ねてきた。その用件は、秋田のどこかの山岳会を紹介してほしいと、都庁山岳部の私の知人からの紹介で来たとの事であった。当時の県内の山岳会への入会者は殆どが二十才代、それも独身者が多く、中高年の入会者は皆無に近い時代であったが、彼女の山に対する熱意は非常に強く、当時、AAC (アキタ・アルパイン・クラブ) の事務局を担当していた関係上、さっそく入会へと勧誘した次第であったが、彼女こそ北林嘉鶴子さんであったのである。

嘉鶴子さんとの出会いから遡ること十年程前、職場での私は、満州からの引揚者住宅に入居している皆さんの新居を設計する一員でもあり、担当したのは北林家であった。打ち合わせは常にご主人だけで、嘉鶴子さんが奥さんであることは露とも知らず、後日初めてご夫妻であるということを知った。いう正に合縁奇縁の出会いであった。入会後の AAC では、多くの山行を共にし、日本山岳会に入会された後も年齢を感じさせない数多くの会・支部山行へ積極的に参加して頂いた。入会早々の AAC による台湾・玉山親善登山への参加以降は、数多くの海外トレッキングを経験、中でも昭和四十七年に一足早くヨーロッパアルプスを訪れ、そして平成十三年には、ネパールヒマヤラのゴーキョピークを八十

北林さんへの想い出 鈴木 裕子

私には、平成四年に入会したが、先輩の北林さんとはなかなか交流する機会がなかった。平成八年に私が転居した団地が北林さんの犬を連れての散歩コースだったので、お互いびつくり。それから時々我が家でコーヒータ임을楽しんだ。その時に、満州時代の事や引き揚げて来てからの苦労等を淡々と話され、そのドラマのような人生を書き残してはと、言ったこともある。世界各地の山々を高価なカメラを持ち、登り歩いたお話をされる時は、その情景を思い出されてか、夢を見ているように。私もそれに引き込まれて、自分も行ってみたいと影響を受けた。自宅の庭にはどうやってお世話をしているのかと思うほど、季節の高山植物がいっぱい咲いていた。

北林さん、沢山のご指導と思い出があります。(合掌)

才にして登頂され、当時は高齢者の登頂は大変珍しく、ヒマラヤでは当時最高齢の登頂を果たしている。最も思い出深い山行は、平成七年五月、古希のお祝いとして、県北にある五ノ宮岳西隣の北林(推定八二〇m)を一年遅れて支部有志でお祝い登山をしたことである。

温厚で、時々冗談を飛ばすあの元氣な姿がいまだに眼に浮かぶ。今頃は彼の地山々を、先に逝った支部会員などと登り楽しんでいるのかもしれない。(合掌)

支部山行 春の里山 「石の塔」 川口 廣志

令和元年の最初の支部山行春の里山は「石の塔」であった。平成十五年の支部山行で登っていたが、すっかり記憶は曖昧になっていた。途中に、最近知名度の高くなってきた「十の瀬藤の郷」があり、併せて藤の花も楽しもうと計画した。

五月十八日(土)、道の駅五城目悠紀の里にて七時三十分、集合した十八名は五台の車に分乗、二八五号線で十の瀬に着いたが、藤の花は三日程早く、まだ蕾であった。ここから山瀬ダムの上湖に架かる田代大橋を渡り、右折して内町林道に入る。林道は整備されて、砂利が敷かれて走りやすい。

十五分程で石の塔への案内板とトイレのある夏越林道の分岐に着く。この先は通行止めとなっているので、ここに駐車して出発した。

夏越林道は平坦で、右側の伐採地を眺めながら進み、二十分程で林道終点に着く。ここより杉林に入るとすぐ小沢を渡る。赤テープに導かれながら登って行くと最低鞍部の夏越峠にいた。ここより尾根道となり、急な登りとなるが、登山道は明瞭だ。緩い登りになると杉の巨木に守られた巨岩が見えてきた。巨岩の先頭には、石に抱えられるように新しい赤い久須志神社奥宮の社殿と参籠所が建っていた。

先着グループは昼食を済ませていたが、全員揃って記念写真を撮った。後続グループは、本年八十六歳を迎える高橋忠雄会員を囲んでの昼食は思

い深いものとなった。下山は、夏越峠より下りの杉林の中からアイコが探ってくださいと言っているので袋一杯に頂いてきた。駐車地点で支部長の挨拶の後、解散となった。



登山口の案内板には「石の塔は昔から眼の神様として信仰されてきた。苔生す岩から滴り落ちる滴が目の薬として、人々がこの滴で眼を洗ったと言われている」と書かれている。新しく建て直された社殿を見ても秋田・青森両県の地元民の信仰が息づいている秘所だと思つた。

大鰐町と大館市共催で「万国ホラ吹き大会」が開催されているが、我が秋田支部では、ホラを吹く人は誰もいなかった。

- 参加者 佐々木民秀 柳田勇悦 鈴木裕子 鎌田倫夫 高橋忠雄 佐藤博 川口廣志 石川祐子 熊谷光子 三浦昭男 会員外八名

全国文部懇談会に参加 鈴木裕子

第三十五回全国支部懇談会は、五月二十五日から二十六日、奥日光・光徳で栃木支部の担当で開催された。開会式・記念講演は中禅寺湖・華厳の滝近くにある日光自然博物館で行われた。

栃木支部長の歓迎の挨拶は、自然豊かな日光国立公園、世界文化遺産・日光東照宮のある栃木を訪れていただき感謝することであった。

記念講演は飯野達夫氏「近代登山とアーネスト・サトウ父子の日光への山旅」と題して、近代登山の黎明とサトウの足跡を語られた。ウエストンよりも早く、北アルプスを世界に紹介している事、また、日本山岳会創立時のメンバーの一人で、第六代会長武田久吉氏はアーネスト・サトウの次男であることも知った。

英国の外交官であったアーネスト・サトウの奥日光の開発に寄与した貢献は大きく、中禅寺湖畔の英国大使館やイタリア大使館の庭園跡地等に、多くの観光客が訪れていること等、興味のある講演であった。

光徳温泉のアストリアホテルに移動しての懇親会。参加者一六〇名。小林会長の挨拶、重廣副会長の乾杯が始まり、久々に会う他支部の会員の方々との交流を楽しんだ。

宴たけなわに、今期で任務を終える小林会長と重廣副会長に、これまでの任務に感謝し、全員で万歳三唱をし、栃木支部長の中締め乾杯で閉会、次の間での二次会となった。

翌、二十七日の交流山行は「切込湖・刈込湖のハイキング」、二班に別れ、バスで湯元温泉登山口に移動。整備された歩道を進んで行くが、苔生す木々や岩々に、まるで原生林の中を行くような風景、歩道は自然のままにアップダウンのある歩道であった。四月に降った雪がまだ少しだけ残っていたが、日差しは強く、気温は高く汗だくなる。雨具の傘を日傘にしている参加者もいた。



刈込湖で宮城・岩手・福島の各支部の方々

刈込湖・切込湖湖畔を進み、溜沼にでる。ここで休憩・昼食。

ここからやや急な登りを終えると、男体山の展望地・山王峠に着く。あとはホテルまでどんどん下るだけ。

光徳農場売店の冷たい牛乳が美味しかった。無事にホテルに着き、流れ解散となった。栃木支部のスタッフの皆様、お疲れ様でした。感謝申し上げます。

- 参加者 今野昌雄 鈴木裕子

太平山山開き市民清掃登山報告

鎌田 倫夫

六月九日(日)、太平山県立自然公園整備促進地域協議会主催の恒例の山開き清掃市民登山が行われた。

秋田市が募集した一般参加者三十名と中央地区の山岳会からのリーダー、サポーター、事務局員の総勢五十名が旭又登山口に集合した。

天候に恵まれたこの日は、例年になく旭又駐車場は早朝から混雑していて、七時三十分頃には満車となり、駐車場手前の車道脇に駐車した会員も多数いた。駐車車のマナーが悪く間隔の取り方が中途半端である。

上小阿仁村からの参加者を乗せたマイクロバス二台と秋田市からの参加者のマイクロバス二台で駐車場は登山者と車で大混雑であった。

秋田市担当の挨拶と準備体操後に、三班編成で出発する。

私は三班のリーダーを担当したが、水場のある御手洗神社手前で苦闘している男性に気付く。七十八歳の男性参加者は十二年ぶりの山登りとのことで、ザックの重さは七キロだという。どうか御手洗までたどり着けたが、通称「七曲」の手前でサポーター隊にお願いして私は三班を引率するが、今度は七曲付近で七十才代の女性が不調を訴えた。彼女のザックから荷物を半分預かり、持っていたエネルギー補給のサプリメントと、下山時に服用するようにとツムラの「漢方薬六八」も渡した。心強かったのは嫁いだ娘さんと一緒に来たこと。姓が違っていたので後で気

付いた。

最後の三班が山頂に到着したのは十二時頃、サポーター隊にお願いした男性が山頂に着いたのは十三時頃だった。

山頂は旭又と同じく大混雑で、河辺地区からの団体も加わり大賑やかであった。

山頂から鳥海山は確認出来なかったが、岩手山、森吉山、秋田駒ヶ岳、それに男鹿半島などを望むことが出来た。

神事と記念撮影を終え、遅れて到着した男性とサポーターを残して十三時下山開始。各班順調に下山し、旭又駐車場に着き、十六時三十分、参加者を乗せたバスはザ・ブーンへと出発した。

最後の参加者がサポーター、看護師と共に、旭又に到着したのは十七時三十分を過ぎていた。



秋田市からの参加者

今年は何年にも比べ雪解けが早く、登山道沿いの花盛りは過ぎていたようだ。毎年のように出迎えてくれるヒメシヤガも名残惜しそうに数本咲き残っていた。マイヅル草はこれから咲こうとしているようであった。無風に近かった割には虫が少なく、快適な登山日和であった。

秋田支部参加者

- 佐々木民秀 堀井弘 鎌田倫夫
- 石川祐子 三浦眞六 安藤金栄
- 若月寿 鈴木裕子 川口廣志
- 長岡幸則 熊谷光子 三浦昭男

参考

秋田市で募集した参加者三十名の平均年齢は六十、六才。二十三才から七十八才 男性十一名 女性十九名

会務報告

◎第一回役員会

- 五月二十二日(水)午後一時から泉コミセンで開催。
- 状況報告 六〇座ラーリの状況、支部山行参加予定者等。
- 全国支部懇談会(栃木支部)二名
- 東北・北海道地区集会(宮城支部)申し込み受付中。
- 設立六十周年に向けて案内状の発送
- 記念山行のタイムスケジュール等。

・太平山集中登山について

七月十三日〜十四日に実施。山頂に宿泊し、山行委員会の太平山登山と交流する。山行委員会の登山には、佐藤博・安藤金栄の両委員が旭又登山口から山頂往復を案内する。

- 役員会の通知等、パソコンメールでお知らせすることの確認。
- 記念手ぬぐいの最終確認。予算に合わせて発注する。
- ・明田富士山に設置している標柱の建て替えについて

出席者

- 鈴木裕子 堀井弘 鎌田倫夫
- 佐藤博 石川祐子 三浦眞六
- 佐々木長秀 安藤金栄
- 熊谷光子 後藤浩二 藤田正義

事務報告

◎事務局会議

- ◎五月十七日 午後一時から鈴木宅役員会打ち合わせ及び発送文書袋詰
- ◎五月二十三日 六十周年記念祝賀会案内状発送

事務局会議出席者

- 鈴木裕子 鎌田倫夫 石川祐子

会員の動静

◎退会

- 浅野 茂春(三十一年四月)
- 澤田石一夫(三十一年四月)